

一八八三年十二月十五日(土)

ドツキネーシヨル
南神村におけるやさしい師匠ダク、聖ラーマクリシユナとごく親しい人たち

● プラフラーダの伝記を聴く——タクール、妻との性的交渉を叱る

タクール、聖ラーマクリシユナは、ドツキネーシヨル南神寺院のあの馴染みの部屋で床の上にお坐りになって、プラフラーダの伝記を聴いておられる。時間は朝の八時ころ。ラームラルさんが、クバクタ・マラーの終わりの方からプラフラーダの伝記を朗読している。

今日は土曜日、オグロハヨン黒分ついで一日。キリスト暦一八八三年十二月十五日。モニはドツキネーシヨル南神村で、タクールのお御足みあしのもとに滞在している。——今もタクールのすぐ横に坐つてプラフラーダ伝を聴いている。部屋にはラカール、ラトウ、ハリシユもいて、それぞれ坐つて朗読を聴いたり、あちこち歩いたりしている。ハズラーはベランダにいる。

タクールはプラフラーダの話を聴きながら前三昧状態になられた。ヒラニヤカシブが殺されてから、人獅子ヌリシンハの世にも恐ろしい姿を見、咆哮ほうごうを聞いたブラマーたち神々は、この世も破壊されるのではないかと怖れて、プラフラーダをヌリシンハのところにやつてなだめさせた。プラフラーダ

は子供のような素直さで彼をほめ讃えた。信者のやさしい気持ちに動かされた獅子は、プラフラータの体を舐めた。タクールは前三味の境地でおっしゃる——「アハア！ アハア！ こんなにも信者を愛してくれて！」と言いながら三昧にお入りになった！ 不動の姿勢——両目のはしから愛の涙が！ 三昧から出られると、タクールは小ベッドのところへ行ってお坐りになった。モニもまた従っていてタクールの足もとの床に坐った。タクールは彼と話をはじめられた。神への道へ入っていないながら妻と性的交渉をしている人々に対して、嫌悪の気持ちあらを露わにしていらつしやる。

聖ラーマクリシュナ「恥ずかしくないだろうか？ 子供がいるのに、まだその上、妻と交わることが嫌だとも思わない——まるで動物みたいだ！ 筋や血や糞や小便や、あんな汚いものの塊が嫌にならないのか！ 至聖の蓮花の御足を思えば、世界一の美女だって火葬場の灰みたいな感じがする。あの肉体がいつまで保つもというのか。あのなかには腸や胆汁や肉や骨といった汚れた品物が入っているのに——その肉体を抱いて喜んでいるとはね！ 恥ずかしくないのかねえ！」

〔タクールの愛の歓びと大実母カーリーのブーシヤの祭祀〕

モニは自分が叱られたような気がして、黙ったままうつぶむいている。タクール、聖ラーマクリシュナは重ねておっしゃる——「あの御方の愛を一たらしでも味わつたら、女と金なんか何の値打ちもないことがわかる。氷砂糖を溶かした飲物を味わつたら、黒糖を溶かした水なんてまずくてたまらなくなるよ。あの御方に熱心に祈って、あの御方の名や栄光をいつも歌っていれば、だんだんあの御方へ

の愛が芽生えてくる」

こうおっしゃると、タクールは神の愛に酔ったようになられて、部屋のなかを歌をうたいながら踊つて歩かれた——

聖きガンガアの岸辺にて

ハリの名呼ぶは何びとか

愛と慈悲との権化する

ニタイ来たると我知りぬ

ニタイなくてはわが命

冷たく凍るほかはなし

十時ころになった。ラームラルさんはカーリー殿で大実母カーリーへの定時礼拝を終えていた。タクールは大実母を拝むためカーリー殿に行かれた。モニもお伴した。堂内に入るとタクールは礼拝の座につかれた。一、二本の花を大実母の足もとにお供えになった。それから、この花をご自分の頭の上にのせて瞑想していらっしゃる。次に歌をうたうように大実母^マを讃えておられる——

おお バヴァーニー あなたの御名^{みな}は

バヴァーニー——シヴァ神の妻、パールヴァ
ティーの別名

この世の恐れを除いてくれると聞いている

私の重荷をあなたに託し 輪廻^{サンサーラ}の恐怖を除いてもらう

おお 母^マよ どうか私を救っておくれ

一八八三年七月二十一日に全訳あり

タクールはカーリー殿からお戻りになると、自室の南東側ベランダに出てお坐りになった。十時すぎ——。まだ神々への献食の祭祀^{アイラディ}はすんでいない。やがて、大実母カーリーとラーダーカーンタ堂からお供え物のバターと果物を少々持ってきて、タクールのおやつを差し上げた。ラカールはじめ、他の信者たちもお相伴^{しょうばん}した。

タクルのそばに坐って、ラカールはスマイルスの『セルフ・ヘルプ(自己救済)』を読んでいる。アースキン公の事跡のところである。

〔無私の仕事——^{ブールナ・ジュニヤニ}完全な智者^{しるし}の特徴は本を読まないこと〕

聖ラーマクリシユナは校長に向かつておっしゃる。

「あれには何を書いてあるんだい？」

校長「その西洋人が、結果を期待することなしに自分の義務を果たした、ということが書いてあります。無私の仕事です」

聖ラーマクリシユナ「そりゃ素晴らしい！ だが、完全な智慧^{しるし}の特徴は——一冊も本をそばに置か

ないことだ(つまり全部体得——身に付けている)。シユカデーヴァみたいに口で話すだけだ。

本でもお経でも、砂と砂糖が混ざっている。聖者は砂糖をとりだして砂を捨てる。聖者は大事なことだけをとり入れる」

シユカデーヴァなどの名をあげて、タクルルはご自分の境涯を暗示されたのではないか？

讚神歌の歌い手、ヴァイシユナヴァ・チャランが来た。彼はそれから、いろんな讚歌をうたつてきかせてくれた。

しばらくしてから、ラームラルさんがタクルルのために、ブラサード(神々の供物のお下がり)を盆にのせて持ってきた。食後、タクルルは少しお休みになった。

夜、モニは音楽塔^{ナハバト}で寝た。大聖母^{シユリー・シユリー・マドフネキ・シヨガ}が南 神寺院でタクルルのお世話をなさるときは、この

音楽塔にお泊まりになるのである。数ヶ月前から、大聖母はカマールプクル村を訪れておられる。